

アルファベット頭文字語の アクセントにおける式保存の例外

——摂津方言若年層を調査対象として——

清 水 泰 行

1. はじめに

近畿方言⁽¹⁾の複合語には、語頭要素の式（高く始まるのか低く始まるのか）が複合語になった場合でも語頭に継承されるというアクセント規則、すなわち式保存がある（和田 1942, 中井 1996, 上野 1997 など）。例えば、高く始まる「夏休み」と低く始まる「春休み」においては、語頭要素の「夏」（高く始まる）と「春」（低く始まる）の式がそれぞれの語頭に継承されている。

この式保存により、頭文字を並べて作った語のうちアルファベットで読む方式の複合語、いわゆるアルファベット頭文字語（以下「A 頭文字語」）は、アルファベットが単独で発音される場合に高く始まるので、(1) のように高く始まる（高起式）のが原則である。しかし実際には、(2) のような式保存の例外となる低く始まる（低起式）ものも多く出現する（「●」は高い拍、「○」は低い拍を表す）。

(1) 式保存（語頭要素：高起式，複合語：高起式）

E (●○)+U (●○)=EU (●●●○)

(2) 式保存の例外（語頭要素：高起式，複合語：低起式）

N (●○)+G (●○)=NG (○○●○)

A 頭文字語の式保存の例外（低起式）については、語全体の長さ（拍

数)と語頭要素の音節構造によって出現環境が示されているが(清水 2006, 中井 2007), 出現環境間の相互関係は明らかにされていない。また, 馴染み度の影響(清水 2006)と地域差・世代差の影響(中井 2007)が指摘されているため, 馴染み度・地域差・世代差の影響を総合的に考慮した上でアクセント調査を行う必要があると考えられる。

この論文では, 近畿方言のうちの摂津方言と若年層に着目し, 馴染み度を制御した2文字からなるアルファベットの組み合わせを用いた読み上げ調査を行い, その結果をもとにA頭文字語のアクセントにおける式保存の例外(低起式)について考察する。具体的には, 先行研究で示された低起式の出現環境(語全体の拍数, 語頭要素の音節構造)について確認すること(4.1節), 低起式の出現環境について新たに指摘すること(4.2節), 低起式の出現環境間の相互関係を明らかにすること(5節), 低起式の出現における個人差について検討すること(6節), 低起式の出現によって摂津方言若年層と東京方言の語頭の高さが類似することについて指摘すること(7節), の5点を目的とする。

議論の前提として, アルファベットを音韻構造⁽²⁾によって分類しておく。英語で用いる26文字のアルファベットは, 拍の数(2拍か3拍以上か)と2拍のものの音節構造(軽音節か重音節⁽³⁾か)に着目すると, 2種3類(3a①, 3a②, 3b)に分けられる⁽⁴⁾。

(3) a. 2拍

①重音節1つからなる: A, B, C, D, E, G, I, J, K, O, P, Q, T, U, V, Y

②軽音節2つからなる: F, L, M, N, S

b. 3拍以上

H, R, Z (以上3拍), W, X (以上4拍)

2. 式保存の例外

式保存の例外は, 語頭要素が高起式であるのにもかかわらず複合語が低

起式になるものと、語頭要素が低起式であるのにもかかわらず複合語が高起式になるものの2種類に分けられる。中井(1996)は、2種類の式保存の例外の特徴をそれぞれ示している。

(4) 2種類の式保存の例外の特徴(中井1996)

a. 語頭要素：高起式，複合語：低起式

- ①量がやや少ない
- ②漢語外来語，特に非伝統的・非日常的な語に多い
- ③複合語全体の長さはあまり関係がない
- ④世代差は見られない

b. 語頭要素：低起式，複合語：高起式

- ①量が多い
- ②和語に多い
- ③複合語全体が短い単語に多い
- ④高齢の話者に多い

A 頭文字語の式保存の例外には、(4 a)の特徴が該当すると考えられる。これに対し清水(2006)は、A 頭文字語の式保存において、4拍と5拍以上で例外となる低起式の出現に大きな差があることから、(4 a③)の記述が当てはまらないことを示した。また、語全体の長さ(拍数)に加え語頭要素の音節構造も式保存の例外の出現に影響を与える環境であることを明らかにした⁽⁵⁾。これを受けた中井(2007)では、(4 a③)の記述が補訂され「語種とは無関係に、5拍語までの全体的な傾向を述べたものだが、A 頭文字語だけではなく、外来語だけ取り出すと当てはまらない」と述べられている。

(5) A 頭文字語の式保存の例外(低起式)の出現環境(清水2006)

- a. 語全体が4拍
- b. 語頭要素が軽音節の連続

一方、若年層を対象とした清水(2006)の分析は、世代差に考慮したものととなっているが、地域差に言及していない。この論文では、地域差・世

代差の両者を考慮する。近畿方言の A 頭文字語のアクセントの式保存において、地域差・世代差が見られることが指摘されているからである（中井 2007）。中井（2007）は、地域差に関しては近畿方言周辺部（調査対象は兵庫県小野市、徳島市、徳島県牟岐町、高知市の話者）で高起式が多く出現すること、近畿方言中央部（調査対象は京都市の話者）で低起式が多く出現することを指摘し、世代差に関しては京都市での調査をもとに壮年層と老年層の多くは若年層を扱った清水（2006）の平均より低起率が高いことを明らかにしている。よって、この論文ではデータの均一性を保つため近畿中央部の方言としての摂津方言と若年層に着目し、A 頭文字語の式を調査する。

3. 調査方法

この調査は、2006 年 3 月～4 月（10 名）、2008 年 5 月～6 月（5 名）に行った。

3.1 調査語と装置

2 文字からなるアルファベットの組み合わせを調査語として使用した。音韻構造から式保存について見るため、調査語は、アルファベット 3 類（「重音節 1 つからなる」「軽音節 2 つからなる」「3 拍以上」）が語頭と語末に全通り（ $3 \times 3 = 9$ 通り）配置されるようにした。

調査語の選定に当たっては、秋田（1982）を参考にして馴染み度を制御した⁽⁶⁾。秋田（1982）においては、アルファベット 2 文字の全組み合わせ（ $26 \times 26 = 676$ ）の「有意味度」, 「連想価」, 「学習難易度」, 「熟知度」の 4 尺度⁽⁷⁾がそれぞれ 7 段階の評定法により数値化されている。このうち、「有意味度」, 「連想価」, 「熟知度」の平均が 2.5 から 3.5 の間の値をとるものを調査語として選び、馴染み度が均一になるようにした⁽⁸⁾。調査語は、馴染みがなく、無意味語と言えるものである。馴染みのある A 頭文字語

を調査に用いると、調査対象者がもともと決まっている（語彙化している）アクセント型を発音する可能性がある。そのような可能性をなくし調査対象者が持つ A 頭文字語の無標のアクセント型を調べるため、この論文では調査語の馴染み度を低く制御する⁽⁹⁾。

9 通りの音韻構造の組み合わせごとに 8 語ずつ選択しているため、全体として、72 語の調査語を用いる。調査語の提示には、小型端末装置（シグマリオン、NTT ドコモ）を用いた。小型端末装置には無作為に並べた調査語を一列に打ち込んである。音声データはテープレコーダーで録音し、分析資料とした。高起式・低起式の判別は筆者が行った。次の表 1 に調査語の情報を示す。

表 1 調査語の音韻構造と項目数

語頭要素	語末要素	調査語	項目数
H	H	GY, JU, OC, PI, BP, CE, AE, VT	8
	LL	DN, BL, IL, JN, QS, UM, YL, GN	8
	Ⅲ	EW, JH, AR, CX, QX, YZ, TW, KR	8
LL	H	NB, SY, LK, MV, SI, FD, LB, FJ	8
	LL	NS, LN, ML, NM, SN, FL, LF, FN	8
	Ⅲ	LX, MH, NR, LW, MW, FR, FH, NW	8
Ⅲ	H	WY, XE, HQ, WG, ZA, RO, XI, WV	8
	LL	WF, WM, ZN, RL, HF, RS, HM, WS	8
	Ⅲ	RW, RX, WR, HZ, WX, XW, HW, HR	8

(H は重音節, L は軽音節, Ⅲ は 3 拍以上)

3.2 調査対象者

調査対象者は、摂津方言に該当する地域で生まれ育った若年層で構成された男性 8 名、女性 7 名の合計 15 名である。親の方言が言語形成に大きな影響を与えるということを考慮して、両親ともに近畿方言話者であることを調査対象者の条件に加えた。次の表 2 に調査対象者の情報を示す⁽¹⁰⁾。

表2 調査対象者と属性

調査対象者	生年(年齢 ⁽¹¹⁾)	性	生育地	父親の生育地	母親の生育地
い	1990 (17)	男	兵庫県尼崎市	兵庫県伊丹市	兵庫県尼崎市
ろ	1979 (26)	女	兵庫県宝塚市	兵庫県宝塚市	大阪府堺市
は	1980 (25)	女	兵庫県三田市	兵庫県三田市	兵庫県三田市
に	1982 (23)	女	大阪府豊中市	兵庫県神戸市灘区	兵庫県加東郡
ほ	1980 (25)	男	兵庫県神戸市東灘区	兵庫県神戸市東灘区	京都府京都市
へ	1991 (17)	男	大阪府豊中市	大阪府豊中市	大阪府大阪市
と	1991 (17)	男	兵庫県宝塚市	兵庫県宝塚市	兵庫県神崎郡
ち	1990 (17)	男	大阪府大阪市	大阪府豊中市	大阪府豊中市
り	1988 (17)	女	大阪府大阪市	大阪府大阪市	大阪府大阪市
ぬ	1982 (23)	男	大阪府豊能郡	大阪府豊能郡	大阪府豊能郡
る	1980 (25)	男	大阪府大阪市	奈良県北葛城郡	大阪府大阪市
を	1988 (17)	女	大阪府大阪市	大阪府大阪市	大阪府堺市
わ	1982 (23)	女	兵庫県尼崎市	大阪府池田市	兵庫県津名郡
か	1990 (17)	男	兵庫県伊丹市	大阪府大阪市	兵庫県伊丹市
よ	1982 (23)	女	大阪府大阪市	大阪府大阪市	大阪府堺市

3.3 手続き

読み上げ課題を調査対象者に行わせた。調査対象者には、装置に表示される調査語を「…が見えた」に入れて、一度ずつ読み上げてもらった。その際、調査語が調査対象者にとって馴染みのある組み合わせになっているものは指摘してもらったようにした⁽¹²⁾。また、極端に間延びするといったような不自然な発音が観察された際には、もう一度発音してもらったようにした⁽¹³⁾。調査語は、調査対象者自身が画面を下にスクロールすることで表示される（「↓」のキーを3回押すと、調査語が1語ずつ表示されるようにしてある）。

調査対象者に調査の進行を知らせるために、装置には「後半にさしかかりました。もう少しですので、よろしくお願いします」「もう少しです」という文も表示されるようにした。

4. 調査結果

4.1 語全体の拍数・語頭要素の音節構造と低起率

ここでは、先行研究で示された出現環境について確認するために、表3に語全体の拍数と低起率の関係、表4に語頭要素の音韻構造と低起率の関係を示す。

表3 語全体の拍数と低起率

拍数	4拍	5拍	6拍	7拍・8拍	合計
高起式	224	162	200	73	659
低起式	256	78	70	17	421
低起率 (%)	53	33	26	19	39

表4 語頭要素の音韻構造と低起率

語頭要素	H+	LL+	Ⅲ+	合計
高起式	237	150	272	659
低起式	123	210	88	421
低起率 (%)	34	58	24	39

(Hは重音節, Lは軽音節, Ⅲは3拍以上, +は形態素境界)

表3より4拍と5拍以上で低起率の差が大きいこと、表4より語頭要素が軽音節の連続で始まるものは低起率が高いことがわかる。この結果は、清水(2006)で示された式保存の例外(低起式)の出現環境(語全体が4拍、語頭要素が軽音節の連続)が、摂津方言若年層においても当てはまることを示している。

4.2 語頭要素が3拍以上からなる調査語と式保存の例外(低起式)

この節では、先行研究で示されていない式保存の例外(低起式)の出現環境について調べるために、語頭要素が3拍以上からなる調査語のデータ

を分析する。

表5に調査語ごとの高起式・低起式の出現数を示す（低起式の出現数が多いものが上位に来るように並べてある）。表5は、語頭要素が「X」, 「Z」からなる調査語には低起式が多く現れることを示している。「X」, 「Z」からなる調査語は、5語のうち4語が低起式の出現数の上位を占めている（語頭要素が「X」, 「Z」からなるものには網掛けして示す）。

表5 語頭要素が3拍以上からなる調査語と高起式・低起式

調査語	高起式	低起式	拍数	調査語	高起式	低起式	拍数
XE	5	10	6	RX	12	3	7
ZA	7	8	5	WR	12	3	7
ZN	8	7	5	XW	12	3	8
XI	8	7	6	RL	13	2	5
HQ	9	6	5	WF	13	2	6
WY	10	5	6	WG	13	2	6
HR	11	4	6	WS	13	2	6
RW	11	4	7	WV	13	2	6
HF	12	3	5	HW	13	2	7
HM	12	3	5	WX	13	2	8
RO	12	3	5	RS	14	1	5
WM	12	3	6	HZ	14	1	6

「X」, 「Z」は第2拍が促音であるという共通性を持つ。第2拍の促音の影響について詳しく見るため、第2拍が促音であるのか、そうでないのか（非促音）という点に着目してデータを分析し、表6として示す。表6より、第2拍が促音であると、低起率が高くなることがわかる。よって、低起式の出現には第2拍が促音であるという環境の関与も考えられる。

表6 第2拍の促音・非促音と低起率（語頭要素が3拍以上からなるもの）

第2拍	高起式	低起式	低起率(%)
促音 (X, Z)	40	35	47
非促音 (H, R, W)	232	53	19

以上のことから、A 頭文字語における式保存の例外（低起式）が出現しやすい環境として、先行研究で示された2点（6 a, b=5 a, b）にもう1点（6 c）を加えた3点が指摘できる。

（6）A 頭文字語における式保存の例外（低起式）の出現環境

- a. 語全体が4拍
- b. 語頭要素が軽音節の連続
- c. 第2拍が促音

次節では、まず（6 a, b）の出現環境の相互関係について明らかにし、その次に出現環境全体の関係についてまとめる。

5. 出現環境間の関係

（6 a, b）の出現環境の相互関係について明らかにするために、「低起式の出現において、語頭要素が軽音節の連続という環境は語全体が4拍という環境より影響力が強い」という仮説を立てデータを分析する。この仮説に従うと、表1における語頭要素が3拍以上（「Ⅲ」）である調査語の中では、「W」が語頭のもの、つまり、最初の2拍が軽音節の連続で始まるものがそれ以外のものより高い低起率になると予測される。

この予測を確かめるため、表1における語頭要素が3拍以上である調査語について、最初の2拍の音節構造が軽音節の連続であるのかそうでないのかという点によって2種類のグループに分け、それぞれの低起率を見る（ただし、低起式の出現環境の一つを満たす、第2拍が促音の調査語は除外する）。

2種類のグループを（7）に示す。（7 a）は軽音節の連続で始まるグループ、（7 b）は第2拍が促音を除く特殊拍（ここでは引き音と二重母音副音）からなる重音節で始まるグループである。

（7） a. WY, WG, WV, WF, WM, WS, WR, WX

b. HQ, RO, RL, HF, RS, HM, RW, RX, HZ, HW, HR

(7 a, b) によって最初の 2 拍の音節構造と低起率の関係をまとめたものを表 7 として示す。表 7 より (7 a) と (7 b) の低起率には差がないことがわかる。このことは、仮説の予測に反し、最初の 2 拍の音節構造は低起率に影響を与えないことを示している。

表 7 最初の 2 拍の音節構造と低起率 (語頭要素が 3 拍以上からなるもの)

最初の 2 拍の音節構造	高起式	低起式	低起率 (%)
oo (7 a)	99	21	18
om (7 b)	133	32	19

(o は自立拍, m は促音を除く特殊拍, oo は軽音節の連続, om は重音節)

したがって、「低起式の出現において、語頭要素が軽音節の連続という環境は語全体が 4 拍という環境より影響力が強い」という仮説は棄却され、語全体が 4 拍という環境が強く影響すると考えられる。具体的には、語全体が 4 拍という環境が満たされているときに語頭要素が軽音節の連続という環境が影響すると考えられる。

一方 (6 c) は、語全体が 4 拍という環境によって、(6 a, b) と区別される。第 2 拍が促音であるアルファベットは 3 拍以上 (「X」, 「Z」) であり、それによって構成される A 頭文字語は必ず 5 拍以上になるからである。以上のことから、拍数によって場合分けをすると、式保存の例外 (低起式) が出現しやすい環境は (8) のようにまとめられる。

(8) a. 語全体が 4 拍の場合

語頭要素が軽音節の連続

b. 語全体が 5 拍以上の場合

第 2 拍が促音

次節では、(8) について、個人差について検討するとともに一般性について言及する。

6. 個人差

個人差の検討を進めるに当たって、調査対象者それぞれの高起式・低起式の出現数について確認しておく。表8に、調査対象者別のデータを示す。

表8 調査対象者別の高起式・低起式の出現数

調査対象者	い	ろ	は	に	ほ	へ	と	ち	り	ぬ	る	を	わ	か	よ
高起式	65	64	61	59	57	57	56	55	38	33	29	28	26	22	9
低起式	7	8	11	13	15	15	16	17	34	39	43	44	46	50	63

表8より、式保存の例外となる低起式の出現数は調査対象者によって広範囲にばらついていることがわかる。では、前節でまとめた(8a, b)の出現環境は調査対象者それぞれに働いているのであろうか。そのことを確かめるために、(8a)については表9で、(8b)については表10でデータをまとめ分析する。

表9は、語全体が4拍の調査語について、語頭要素の音節構造の違いによって、調査対象者ごとに低起率を求めたものである。表9から、調査対象者の「へ」と「か」を除き、語頭要素が軽音節の連続(「oo+」)の場合

表9 語頭要素の音節構造と低起率(語全体が4拍)

語頭要素	式	い	ろ	は	に	ほ	へ	と	ち	り	ぬ	る	を	わ	か	よ
oo+	高起	12	11	8	11	10	12	8	6	1	0	0	2	0	4	0
	低起	4	5	8	5	6	4	8	10	15	16	16	14	16	12	16
「oo+」の低起率(%)		25	31	50	30	38	25	50	63	94	100	100	88	100	75	100
om+	高起	14	15	14	16	15	12	12	12	5	4	4	7	4	1	4
	低起	2	1	2	0	1	4	4	4	11	12	12	9	12	15	12
「om+」の低起率(%)		13	6	13	0	6	25	25	25	69	75	75	56	75	94	75

(oは自立拍, mは促音を除く特殊拍, +は形態素境界, ooは軽音節の連続, omは重音節)

に重音節（第2拍が促音以外の特殊拍からなるもの「om+」）の場合より低起率が高いことがわかる。

表10は、語頭要素が3拍以上（語全体が5拍以上）の調査語について、第2拍の違いによって、調査対象者ごとに低起率を求めたものである。表10から、低起式が全く現れなかった調査対象者の「い」～「は」を除き、第2拍が促音の場合に非促音の場合より低起率が高いことがわかる。

表10 第2拍の促音・非促音と低起率（語頭要素が3拍以上）

第2拍	式	い	ろ	は	に	ほ	へ	と	ち	り	ぬ	る	を	わ	か	よ
促音	高起	5	5	5	4	1	2	4	4	2	4	2	1	1	0	0
	低起	0	0	0	1	4	3	1	1	3	1	3	4	4	5	5
「促音」の低起率(%)		0	0	0	20	80	60	20	20	60	20	60	80	80	100	100
非促音	高起	19	19	19	16	18	18	17	18	17	19	12	10	17	12	1
	低起	0	0	0	3	1	1	2	1	2	0	7	9	2	7	18
「非促音」の低起率(%)		0	0	0	16	5	5	11	5	11	0	37	47	11	37	95

（o は自立拍，m は促音を除く特殊拍，+ は形態素境界，oo は軽音節の連続，om は重音節）

以上より、(8) でまとめた A 頭文字語における式保存の例外（低起式）の出現環境は全体の傾向を捉えており一般性があると考えられる。

7. 摂津方言若年層と東京方言の類似性

前節までの考察により、摂津方言若年層における A 頭文字語の式保存の例外（低起式）の出現環境（語全体が4拍の場合：語頭要素が軽音節の連続，語全体が5拍以上の場合：第2拍が促音）が示された。この節では、摂津方言若年層と東京方言において、低起式の出現によって A 頭文字語の語頭の高さが類似すると考えられることを述べる。

東京方言の A 頭文字語の語頭の高さに関しては、東京方言の一般的な

音韻的制約の原則とその例外が当てはまるものとして考察する⁽¹⁴⁾。東京方言の音韻的制約とは、「第1拍と第2拍の高さが異なる」というものであるが、制約に従わない語頭の音調もある。服部(1954)は、(9a)のように軽音節の連続で始まるものは原則通りの「低高」の音調であるのに対し、(9b)のように重音節(第2拍が促音以外の特殊拍からなるもの)で始まるものは例外の「高高」の音調であることを観察している(服部1954では傍線式表記)。

(9) 服部(1954)

- a. 語頭要素が軽音節の連続：原則通り

コマギレ(細切れ), コナゴナ(粉々): ○●●●

- b. 語頭要素が重音節(第2拍が促音以外の特殊拍のもの): 例外

コーバン(交番), コンダン(懇談): ●●●●

服部(1954)の指摘は、第1拍から高い音調が続くという例外(「高高」)についてであるが、第1拍から低い音調が続くという例外(「低低」)もある。川上(1966)は、第2拍が無声である場合(第2拍が促音、第2拍の母音が無声)は、(10)のように「低低」の音調であることを指摘している。

(10) 川上(1966)

- a. 第2拍が促音：例外

コッソリ: ○○●○, セッキン(接近): ○○●●

- b. 第2拍の母音が無声：例外

タスケル: ○○●○, トクホン(読本): ○○●●

以上のような例外に関して、東京方言のA頭文字語に当てはめて考察する。A頭文字語の語頭の音調に関しては、(9b)と(10a)の例外が対応すると考えられる。この例外と語全体の拍数に着目すると、東京方言におけるA頭文字語の語頭要素の音調は表11のようにまとめられる。「低高」の原則通りにならないのは、第2拍が促音を除く特殊拍からなる重音節で始まるもの(語全体が4拍における「om+」と語全体が5拍以上に

における「omo+」と、第2拍が促音のもの（語全体が5拍以上における「oQo(o)+」）であると考えられる（前者は「高高」、後者は「低低」の例外）。語頭の高さという観点からは、第2拍が促音を除く特殊拍からなる重音節で始まるものが「高」、それ以外のものは「低」と捉えられる。

表 11 A 頭文字語における東京方言の語頭要素の音調

語全体	語頭要素	対応する調査語の例	語頭要素の音調	語頭の高さ
4 拍	oo+	NB, SY	○●…	低
	om+	DN, IL	●●…	高
5 拍以上	oQo(o)+	ZN, XI	○○●(●)…	低
	oom+	WV, WM	○●●●…	低
	omo+	RO, HF	●●●…	高

(o は自立拍, m は促音を除く特殊拍, Q は促音, + は形態素境界, oo は軽音節の連続, om と oQ は重音節)

一方、摂津方言若年層における A 頭文字語の語頭要素の音調は、式保存に従う場合、表 12 のようにまとめられる（式保存に従う場合の表 12 は近畿方言全体のまとめになると言える）。式保存に従う場合は、高起式になることから語頭の高さは全て「高」である。語頭の高さについて東京方言と比較すると、第2拍が促音を除く特殊拍からなる重音節で始まるもの（「om+」, 「omo+」）が類似すると考えられる。

表 12 A 頭文字語における式保存による摂津方言若年層の語頭要素の音調

語全体	語頭要素	調査語の例	語頭要素の音調	語頭の高さ	東京方言との類似性
4 拍	oo+	NB, SY	●●…	高	なし
	om+	DN, IL	●●…	高	あり
5 拍以上	oQo(o)+	ZN, XI	●●●(●)…	高	なし
	oom+	WV, WM	●●●●…	高	なし
	omo+	RO, HF	●●●…	高	あり

(o は自立拍, m は促音を除く特殊拍, Q は促音, + は形態素境界, oo は軽音節の連続, om と oQ は重音節)

ここで、式保存の例外（低起式）の出現を考慮して語頭要素の音調についてまとめたものを表 13 として示す。低起式の出現環境は、語全体が 4 拍の場合の語頭要素が軽音節の連続のもの（「oo+」）と、語全体が 5 拍以上の場合の第 2 拍が促音のもの（「oQo(o)+」）が満たしている。この環境において、低起式が出現すると語頭の高さは「低」になる。

表 13 A 頭文字語における低起式の出現による摂津方言若年層の語頭要素の音調

語全体	語頭要素	調査語の例	低起式	語頭要素の音調	語頭の高さ	東京方言との類似性
4 拍	oo+	NB, SY	出現	○○…	低	あり
	om+	DN, IL	×	●●…	高	あり
5 拍以上	oQo(o)+	ZN, XI	出現	○○○(○)…	低	あり
	oom+	WV, WM	×	●●●●…	高	なし
	omo+	RO, HF	×	●●●…	高	あり

〔o〕は自立拍，〔m〕は促音を除く特殊拍，〔Q〕は促音，〔+〕は形態素境界，oo：軽音節の連続，om：重音節

語頭の高さを東京方言（表 11）と比較すると、語全体が 5 拍以上で語頭要素が軽音節の連続（「oom+」）の場合を除き、類似すると考えられる。摂津方言若年層と東京方言においてなぜ語頭の高さに類似性があるのかについては、未解決の問題である。その解明のためには、中年層、高年層を含めて考察する必要がある。

8. おわりに

この論文では、A 頭文字語のアクセントにおける式保存の例外（低起式）について、摂津方言若年層に対する調査結果を先行研究に照らし合わせて考察した。摂津方言若年層における A 頭文字語の式保存の例外（低起式）が出現しやすい環境については、①語全体が 4 拍の場合：語頭要素が軽音節の連続、②語全体が 5 拍以上の場合：第 2 拍が促音、の 2 点にまとめて示した。さらに、この 2 点の出現環境には摂津方言若年層において

一般性があると考えられること、摂津方言若年層と東京方言の間には語頭の高さに関して類似性があると考えられることを指摘した。

今後の課題として、この論文でまとめた出現環境が、摂津方言以外の近畿方言の地域と若年層以外の世代に適用可能であるのかについて考察を行いたい。また、摂津方言若年層と東京方言の語頭の高さについては、東京方言からの調査結果をもとに類似性を明らかにするとともに類似性が生じる理由を検討したい。

注

- (1) 京阪式アクセントを持つ近畿方言のことを指して便宜的に「近畿方言」と呼ぶ。
- (2) この論文では、拍数と音節の軽重（「軽音節」、**「重音節」**）を指して「音韻構造」という用語を使う。「軽音節」は自立拍だけからなる音節、「重音節」は「自立拍+特殊拍」という構造の音節である。
- (3) 重音節のうち「自立拍+促音」の構造を持つものは、それ以外の重音節とは区別されることもある。上野（2007, 2009）は、「自立拍+促音」で始まる場合に語頭の上昇が3拍目であることに着目し他の重音節と区別し（「自立拍+促音」は「子音性重音節」、それ以外は「母音性重音節」と呼んでいる）、田中（2008：第5章）は「自立拍+促音」のソノリティ（音の聞き取りやすさの度合い）の低さに着目し「擬似的な軽音節」として扱っている。この論文では、考察に影響しないと考えられるため、特殊拍の種類と重音節の関係について立ち入らない。
- (4) (3b) においては、「W」のみが軽音節の連続で始まるという特徴を持つ。5節では、この特徴を活用し、語全体の拍数と語頭要素の音節構造の相互関係について議論する。
- (5) (5) は、A 頭文字語における平板型の出現に際し並行的に捉えられる環境である。Kubozono（2003）は平板型の出現に、①語全体が4拍、②語末要素が軽音節の連続、③語頭要素が軽音節の連続で始まるという3点が影響することを指摘している。なお、この3点は、近畿方言の平板型の出現にも影響する（Kubozono and Fukui 2006, 清水 2006）。
- (6) 清水（2006）は A 頭文字語において馴染み度と式保存の例外に相関があるとしているが、中井（2007）は相関関係が単純には導けないとしている。ただし、中井（2007）の馴染み度は清水（2006）と一致しておらず両者は同列に扱えないと考えられる。馴染み度と式保存の例外については馴染み度を検

討し議論する必要がある。

- (7) 「有意味度」は「意味がない／ある」, 「連想価」は「連想しにくい／しやすい」, 「学習難易度」は「覚えにくい／やすい」, 「熟知度」は過去に見たことがあるかないかに対して「ない／多い」をそれぞれ意味する。評定に当たっては、例えば、「有意味度」の評定においては、「非常に」意味があるなら「7」, 「かなり」意味があるなら「6」, 「やや」意味があるなら「5」, 「どちらともいえない」なら「4」, 「やや」意味がないなら「3」, 「かなり」意味がないなら「2」, 「非常に」意味がないなら「1」というように値が設定される。
- (8) この論文において、馴染み度の制御の際、「学習難易度」を平均値の計算から外したのは、「学習難易度」の評定は「他の3尺度の評定と相違した基準で行われていた」とされており（秋田1982:27）、他の尺度と同列に扱うことが困難であると考えたからである。また、「有意味度」, 「連想価」, 「熟知度」の平均の区間を2.5から3.5の間に設定したのは、一定数の調査語が確保できる区間だったからである。
- (9) 無意味語や新造語を用いた調査の妥当性については、窪菌（2009）で検討されている。
- (10) 調査対象者の「い」から「よ」の順番は、調査における高起式の出現数をもとに、便宜的に並べたものである（「い」: 最多, 「よ」: 最少）。
- (11) 参考として、調査時の年齢を示す。
- (12) 馴染み度が高い調査語はデータの均一性を保つため除く必要があるが、馴染みのある組み合わせとして指摘があった調査語のうち、実際に除く必要があると考えられるような馴染み度の極端に高いものはなかった。
- (13) 「H」は「エッチ」, 「W」は「ダブル」と読まれることもあるが、調査対象者は全員「エイチ」「ダブリュー」と発音した。なお、「ダブリュー」の引き音を短くばらついて発音する話者もいたが、考察に影響しないと考えられるため、「ダブリュー」で統一して分析する。
- (14) この論文では、東京方言話者に対する調査は行っておらず、A頭文字語における語頭の高さに関しては、検証が必要であることを注意しておく。

引用文献

- 秋田清（1982）「評定法によるアルファベット2文字音節の有意味度、連想価、学習難易度、熟知度」『人文学』137, 19-45, 同志社大学人文学会。
- 上野善道（1997）「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」杉藤美代子（監修）、国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫（編）『日本語音声2』231-270, 三省堂。
- 上野善道（2007）「方言のアクセント研究はどうなっているか」『国文学解釈と鑑

- 賞』72: 7, 39-46.
- 上野善道 (2009) 「通時的にしか説明できない共時アクセント現象」『言語』38: 2, 74-81.
- 川上葵 (1966) 「アクセント現象とアクセント観念」『音声学会会報』121, 8-11. (川上 1995 所収)
- 川上葵 (1995) 『日本語アクセント論集』汲古書院.
- 窪菌晴夫 (2009) 「音韻規則の実在性について」由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』11-23, くろしお出版.
- 清水泰行 (2006) 「近畿方言におけるアルファベット頭文字語のアクセントと式保存」『音声研究』10: 3, 83-95.
- 田中真一 (2008) 『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』東京: くろしお出版.
- 中井幸比古 (1996) 「京都アクセントにおける式保存について」平山輝男博士米寿記念会 (編) 『日本語研究諸領域の視点 下巻』, 1015-1035, 明治書院.
- 中井幸比古 (2007) 「中央式アクセントにおけるアルファベット頭文字語のアクセント」『音声研究』11: 3, 69-86.
- 服部四郎 (1954) 「音韻論から見た国語のアクセント」『国語研究』2, 2-50.
- 和田實 (1942) 「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」『音声学協会会報』71, 10-13.
- Kubozono, Haruo (2003) "Accent of alphabetic acronyms in Tokyo Japanese." In Takeru Honma, Masao Okazaki, Toshiyuki Tabata, Shin-ichi Tanaka (eds.) *A New Century of Phonology and Phonological Theory*, 356-370, Kaitakusya.
- Kubozono, Haruo and Fukui Misa (2006) "Phonological structure and unaccented nouns in Tokyo and Osaka Japanese." In Timothy J. Vance and Kimberly Jones (eds.) *Japanese Korean Linguistics* 14, 39-50.

(しみず やすゆき・関西学院大学大学院文学研究科研究員)